輝け! けんせつ小町

土木技術 川原井裕子(右)

清水建設株式会社 関東支店
土木技術部 第1グループ

土木営業 中山かおり(左)

清水建設株式会社 土木総本部
第一土木営業本部 営業部

「けんせつ小町」は、
日建連が定めた建設業で
活躍する女性の愛称です。

建設業界を目指す女性が少ない時代に土木技術者になることを決意し、入社以来長きにわたり会社を支えてきた小町を今号では2人紹介する。働き方やキャリアを模索しながら歩み続け、自らの立ち位置を見出した今、その笑顔は自信と充実感に溢れている。

写真：山田新治郎

女性土木技術者のパイオニア

二十年以上清水建設㈱で働き続け、今や会社になくてはならない存在となっている小町が二人いる。一九九二年入社の川原井と一九九四年入社の中山だ。

川原井が入社した当時は、同社では土木系女性総合職の採用例がなく、川原井は一般職として入社後、土木東京支店技術部に配属された。

「大学の先輩が当社の土木系の女性技術者一期生として入社されていて、OG会で仕事の話をよく聞いていました。そのおかげで女性技術者が少ないことに不安はなく、大学で学んできた土木工学を活かしてゼネコンでものづくりの仕事がしたいという想いで入社しました」

土木分野のダイバーシティ推進部会で一緒に活動をしたこともある2人。今年の11月に行われたダイバーシティフォーラムでは、ジェンダーギャップやジェネレーションギャップについて意見を交し合った。

川原井が入社してから二年後、中山は初の土木系女性総合職として入社。川原井と同じ土木東京支店に配属され、東京湾横断道路建設工事の現場監督として海ほたるの建設に携わる。

「高校の先生から『これからは土木分野にも女性の時代が来る』と言われたことがきっかけで、大学で土木を専攻しました。就職活動の際、土木系の女性現場監督はまだいないという話を聞き、『誰もやっていないことをやるのは面白そう』と思い入社を決めました」

縁に導かれた川原井と好奇心を追った中山。きっかけは違えど女性が少ないなかで土木技術者としての道を歩み始めた二人のキャリアは、その後も何度か交差していく。

自分の立場を俯瞰する

川原井は本社の土木技術部で十二年間にわたり、地下鉄新設工事などの仮設設計や補修計画に携わり、知識や経験を蓄えていく。二〇〇四年、土木技術部から土木設計部に異動すると、首都高速道路トンネル工事の躯体構造設計など大型プロジェクトに携わり、設計職として頭角を現す。そして入社して二十年が経った頃、これまでの実績が評価され、総合職へのコース転換を打診される。

「お話をいただいた時は『是非チャレンジしたいです』と返事をしました。というのも、技術者として管理職を目指したいという気持ちがあったからです」

川原井が管理職に就きたいと思った理由は何なのか。

「四〇歳を過ぎた頃、同期や後輩が管理職となる中で、肩書きのない自分に対してもどかしさが生まれました。取引先との打ち合わせで、『初めて会うお客様から私はどう見えるのだろう』と疑問を持ったのがきっかけです。自分の技術者としての立場を明確にして、責任を持って仕事がしたいと思うようになりました」

〝技術者としてどうありたいか〟という原点に立ち返り次のステップを模索する川原井だったが、この時は総合職への転換を断念している。

「当時は家庭の事情で転勤を伴う働き方が難しく、やむを得ず諦めました」

そんな時上司から転勤を伴わない働き方で管理職への道が開ける地域職へのコース転換を勧められ、地域職として管理職を目指す道を選択した。

地域職となってからも引き続き土木設計部で業務に携わり三年後、目標としていた管理職に就く。同時に、技術企画部に異動し、今までとは異なる業務を経験する。

「管理職に就いて約半年後、改めて総合職への転換を上司から打診されたんです。二度目のチャンスをどうしても諦めきれず、家族に想い

相手を尊重しともに進む

「仕事に対しては厳しいですが、その他ではとてもやさしくメリハリがあって頼りになる上司です。業務管理や勤務管理などもしっかりとしてくださいます」（西面さん（中央））
「10年以上前、技術部時代にも一緒に働いていました。芯が強くてみんなを引っ張ってくれるところは昔と変わりませんが、グループ長になって更に責任感が強くなりましたね」（稲井主査（左））

をぶつけて説得しました」

総合職となった川原井は、仕事の幅が大きく広がっていく。二度のコース転換は、自分を見つめ直す良い機会になったと感慨深く話してくれた。

若い芽を育てていく

今年で入社二十六年目となった川原井は、四月から関東支店土木技術部でグループ長を務めている。土木技術・設計のスペシャリストとして、関東甲信六県にある一〇箇所余りの現場の技術支援と営業案件の支援を担当しており、現場には欠かせないキーマンだ。そして多忙のなか、若手技術者の育成にも力を入れている。

「これまでOJT制度で指導をした若手社員は男女合わせて一〇名を超えます。技術者として自分の意見を明確に持ってもらいたいので、まずは自分で考えるよう指導しています」

働き方改革が注目されている今、限られた時間のなかでいかに効率的に業務を進めるか考えるのは管理職の仕事。川原井は一人ひとりの技術力と性格に配慮し指導していくという。

「注視するのは男女に関わらず技術力と仕事への向き合い方です。部下の得手不得手や性格を理解し、個人を尊重しながら指導することが大切だと考えています。それぞれの持ち味を活かして業務に取り組めるよう心掛けています」

キャリアを積み技術者として強い信念を持っていながらも、おおらかで物腰は柔らかく一人ひとりと真摯に向き合う川原井。その姿勢は周囲からの信頼へと繋がっている。

「中山は物怖じせず、どこへでも気兼ねなく顔を出すので営業に向いていると思います。他社では女性の営業職はほとんど見かけません。まさに当社の営業の顔ですね」（中原部長）

誰もやっていないことに臨む

壁を乗り越え挑戦を続ける

一方、中山は入社してから四年間、土木東京支店で現場監督として三つの工事に従事する。その後社内のローテーション制度で土木技術部へ異動になり、十一年間コンクリート構造物の維持管理業務に携わった後、二〇〇九年より営業部で働いている。女性初の土木系総合職として活躍している中山だが、会社を辞めたいと感じたことが二度あるという。

「一度目は入社二年目です。好奇心でこの業界に入りましたが、初めての現場勤務で、働き方や将来への不安が溜まってしまって。現場が竣工するタイミングで所長に退職を切り出しました」

話を聞いた所長は、「現場経験が豊富な部長と一度じっくり話をしてこい」と一言告げると中山を本社へと送り出した。

「自分の気持ちをとにかく思いつくまま話し続けましたが、部長は静かに受け止めてくださいました。心の内をすべて吐き出したらすっと気が楽になり、やっと自分の状況を理解できたんです」

無意識のうちに自分にプレッシャーをかけ過ぎて周囲と本音で話し合うことができていなか

った中山は、コミュニケーションの重要性を実感した。

「二度目は、結婚した時です。これまでと大きく環境が変わり、世の中に置いていかれたような感覚になって急に働きづらくなってしまったんです」

五月の連休中に懸命に自問自答した中山は自ら気持ちを整理して働き続けることを決意。未経験のことに挑戦する際、反動としてかかる大きなプレッシャーの壁を乗り越えた。

更なる挑戦

土木技術本部時代、中山は二度の育児休暇を取得し仕事から離れた時間で新しい発見をする。

「保育園のママ友達との交流で自分の視野がグッと広がりました。年代、職業、家庭や仕事に対する価値観はみなさん異なるので、様々な働き方や暮らし方を知って、自分のことを客観的に見られるようになったんです」

その後仕事に復帰した中山はこれから何をしたいか考え、土木部門では女性が経験していない営業職への異動を希望する。またも好奇心から未知の世界に飛び込み、官庁担当として新たな一歩を踏み出した。

「それまでは、ゼネコンに現場があるのは当たり前だと思っていましたが、営業部に来て現場一つを受注するためにとてつもない労力を要することを初めて知りました。会社の重要な役割を担っており、責任は重いのですがその分やりがいも大きいです」

中山は営業部の仕事をする傍ら、二〇一四年に行われた（公社）土木学会一〇〇周年記念事業の実行委員に選出され社外活動にも奮闘した。

「官民学と様々な立場の方々と一緒になっての仕事だったのですが、それぞれ価値観や物事の進め方が全然違うので意思決定に苦労しました。ただ皆さんいいものをつくりたいという想いは同じなので、葛藤しながらも諦めずに前へ進めることが大切だと学びました」

仕事において〝役に立ちたい〟と何度も口にする中山は、先頭に立って引っ張るタイプではなく、隙間を埋める、人と人を繋ぐ仕事が合っていると自らを振り返る。新しいことにどんどん挑戦する好奇心を持っているだけでなく、様々な立場の働き方や考え方を理解している中山は、これからもいろいろな道を切り開いていくに違いない。

女性の活躍推進が大きく取り上げられる前から建設業界で働き続けている小町たち。二人の働き方やキャリアの積み方は全く異なるが、土木技術者として仕事にかける人一倍強い想い、自分なりの仕事を見つけ全力で取り組む姿は重なって見えた。二人の姿は若手社員に大きな影響を与えていくはずだ。

担当現場へと向かう川原井。「お客様との打ち合わせや技術巡回など、なるべく相手と直接会って会話することを大切にしています」

かわらい・ゆうこ●1968年、東京都生まれ。建設基礎工学科卒業後、1992年、一般職として清水建設㈱に入社。土木東京支店・土木事業本部で12年間基礎・仮設設計業務に、土木技術本部設計部で8年間構造設計に従事した後、2012年に地域職、2015年に総合職へコース転換し、現在は関東支店土木技術部でグループ長として技術支援・営業支援を担当している。

「入社した後輩の女性たちがちょっとしたことで辞めるのはもったいない。しなくてもよい苦労はできるだけ取り除いてあげたいと思っています」

なかやま・かおり●1971年、福岡県生まれ。土木系学科卒業後、1994年、清水建設㈱に女性初の土木系総合職として入社。土木東京支店で4年間現場監督を務めた後、土木技術本部で11年間コンクリート構造物の維持管理業務を行う。2009年より土木営業本部へ異動し、土木学会100周年記念事業の実行委員などの社外活動にも尽力する。現在は副部長として官庁営業を担当している。